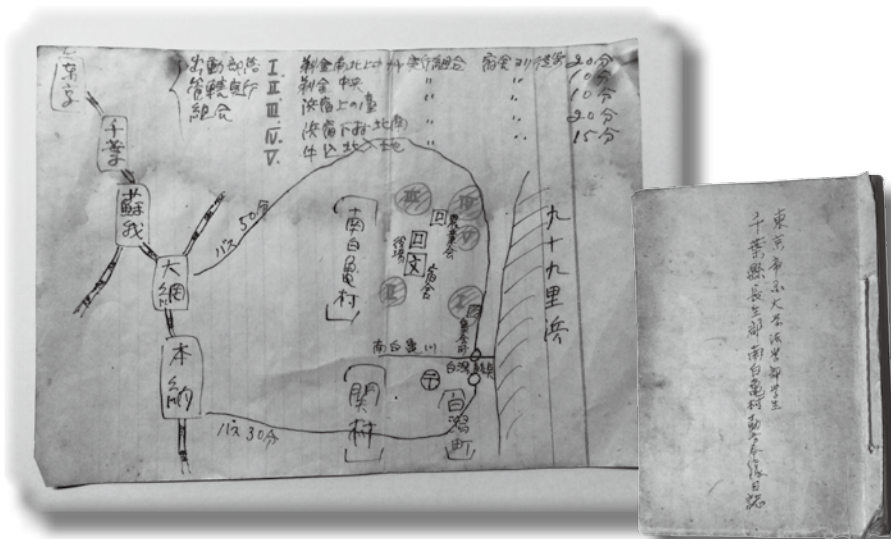


東京大学史史料室ニュース

第52号 2014・03・31

目次

「矢内原文庫」のデジタル・アーカイブ化に向けて…………… 2
 「学生とともに考える学徒出陣70周年—記憶と継承」
 —（東京大学附属図書館・東京大学史史料室共催）を終えて、一緒に考えてみたこと— …… 4
 受贈図書一覧（抄）…………… 6
 史料室日誌抄録…………… 8



三浦成夫関係資料
(学徒動員関係資料)

2013年度寄贈受入れの学徒動員・学徒出陣関係資料



大竹海兵団第七期新兵
東京帝国大学法学部
思ひ出の記（学徒出陣関係資料）

学生問題研究所と「矢内原文庫」

2013年4月より、史料室所蔵の学生問題研究所関連資料の整理とデジタル・アーカイブ化に向けた研究プロジェクトが開始された。本プロジェクトは、科学研究費助成事業・科学研究費補助金(基盤研究(A))「矢内原忠雄学生問題研究所未発掘資料から見る1950年代の学生運動と若者意識の分析」(研究代表者:吉見俊哉)による5年間の事業であり、東京大学史料室の協力を得ながら進められているものである。

本プロジェクトが対象としている学生問題研究所関連資料は通称「矢内原文庫」と呼ばれ、長らく未整理のまま安田講堂内に保管されてきたものである。資料の柏キャンパスへの移転は、本資料を再発見し、学生問題研究所の歴史的意義を再考する契機となった。

学生問題研究所は、東京大学元総長の矢内原忠雄により創設された。総長在任中に構想されたものとみられ、矢内原の構想に関心をもったアジア財団が資金援助をし、1958年10月15日、東京都千代田区神田駿河台2丁目1番地(後に5番地に移転)に開設された。お茶の水基督の教会の4、5階を研究所の施設として借り、月々特別献金として165,000円を支払っていた。

アジア財団による支援期間は、当初3年であったが、1年間の延長が決定され、1962年8月10日閉鎖、翌年10月19日に残務整理が完了した。閉鎖に伴い、全資料が教育学部に一括移管された。このとき一括移管された資料は、現在、史料室に残されているロッカー5つ分の資料と同一のものと推定される。学生問題研究所は、大学生についての科学研究を掲げ、(1)研究部、(2)学生相談所、(3)資料室の3つの部門を設けた。

(1)研究部は、学生に関係のある種々の問題に対する教育学的・社会学的な分析と解明を担当する第1班、心理学的な分析と解明を担当する第2班、学生の精神生活一般の向上・充実に関する問題(哲学・道徳・宗教・芸術・政治に対する学生の態度調査など)を対象とする第3班から成っていた。各研究班別に大規模な調査研究が行われ、そのテーマは多岐にわたっている。具体的な成果には、「大学生の不安についての基礎的研究」「高校の進路指導と大学生活」「現代学生の生活意識の研究」「大学生の課外活動についての調査」「浪人・新卒の学力差の研究」「戦後日本学生運動史」「安保問題における学生の行動とその意識」「就職に際しての大学生の考え方について」「新入生に対するオリエンテーション」「現代の学生が最も重要だと考えている問題」「大学生活とアルバイト」「現代の学生と宗教の問題」「日本における留学生生活」などがある。

(2)学生相談所は、学生の来所もしくは手紙により「学生の不安」に関する相談に応じていた。笠松章(精神衛生、性格)、矢内原忠雄(人生観)、海後宗臣(家庭・環境問題)、岡部彌太郎(進路選択、適性)、沢田慶輔(性格、精神衛生、学業)、手塚富雄(人生観、その他環境問題)、斯波義慧(進路選択、家庭・環境問題)、

石上太郎(進路選択、家庭・環境問題)、上出弘之(精神衛生、性格)といったように、内容別の専門の相談員が相談を担当した。相談には、東京大学のみならず明治大学、早稲田大学、日本大学などの学生も訪れていた。相談内容については『学生相談所における相談内容についての研究』によって整理、考察されている。

(3)資料室は、安保闘争をはじめとする学生運動への関心の高まりを受け、1960年6月に設置された。資料室の主な活動は、①大学新聞、学生サークルによる生活・意識などの調査・記録、学生問題に関する図書・雑誌・報告書などの収集、②月報の作成、③「安保問題」と政治情勢に対応した学生の行動と思考の推移についての分析と考察に分けられる。第3班の協力により、新聞・雑誌のスクラップ記事が作成され、学生団体が配布したビラ・パンフレット類が集中的に収集されている。これらの資料収集の規模と量は圧倒的である。集積された学生運動関連の資料群は、これだけをとってみても貴重なコレクションといえよう。

以上の体制のもとで学生問題研究所は、毎月の懇談会、年2回程度の報告会、報告書など刊行物の発行、面接やアンケートによる調査といった研究活動を行っていた。「矢内原文庫」として残された資料には、主に(1)学生問題研究所が発行した刊行物とその原稿、(2)調査票、(3)ビラや大学新聞などの収集資料、(4)学生問題関連の国内外の研究紀要、(5)雇用・会計関連の帳簿類があり、その量は膨大である。これらの資料は、学生問題研究所の全貌を解明するうえで重要であるのみならず、1950年代から60年代にかけての学生運動や若者意識を解明するための貴重な一次資料となる。また、総長職を退いた晩年の矢内原忠雄が何を目指していたのかを理解するうえでも決定的に重要であり、矢内原研究に新たな展開をもたらす資料として期待される。

なお、本資料群は、教育学部への一括移管以来、「矢内原文庫」という呼称が与えられてきた。矢内原が設立理念と資金面において重要な役割を果たし、矢内原の人脈が主要スタッフの起用に大きく関与していることは間違いない。なかでも、西村秀夫が起用されたことは、その後の学生運動の展開を考える上でも重要である。しかし、矢内原自体は、かならずしも、学生問題研究所の運営や研究内容について現場レベルで指導的な役割を果たしていたわけではなかった。実際に現場の実務を指揮したのは海後宗臣であり、「矢内原文庫」という名称も海後によって与えられたものである可能性が高い。資料内容からいえば「学生問題研究所資料」などの名称の方が実態に即しており、今後の研究にとっては適切であろうが、資料の全貌が明確になるまでの間は慣例に従って「矢内原文庫」と称することとしたい。

デジタル・アーカイブス化に向けての基礎作業

2012年度より着手された史料室所蔵資料の柏キャンパスへの移転に伴い、矢内原文庫はその全資料が柏キャンパスにて管理されることとなった。矢内原文庫は、移転前は「矢内原文庫」と記されたキャビネット5本に収められていた(写真1)。キャビネット内には



麻縄で縛られ包装された資料の束が、ほとんど隙間のない状態で収納されていた(写真2)。



本科研のプロジェクトが開始された段階で、矢内原文庫にはどのような内容の資料が含まれているのか、その数量がどの程度あるのかなどを示す手掛かりがなかった。そこで、資料の原秩序に即して、資料の目録情報の取得を進めた。まず、資料がキャビネット内のどの位置にあったものかを記録し、その順に従って資料の束ごとにIDを割り振った(写真3)。このIDをシリーズIDとし、開封前の状態を撮影し記録した。そのうえで、資料を開封し、国際標準記録史料記述の一般原則 ISAD(G)を基本としながら、シリーズIDごとに目録情報を取得した。目録情報取得後は、キャビネットに戻すのではなく、箱詰めをし、史料室の書庫に配架した。この作業を続けて全資料を整理し、ID数は149となった。

次に、それぞれのシリーズ(資料の束)のなかに、どのような資料が含まれているのかを記録した。これをアイテムIDとし、同じくISAD(G)の形式を基本としながら目録情報を取得した。ただし、調査票や面接カードのように、1点1点の資料の違いを目録情報と



して記録することの意義が見出しにくい資料は、アイテムIDの取得を見送った。調査票については、調査方法の批判や再集計といったかたちでの応用的な利用を検討している。

さらに、目録化が完了した資料のうち、研究利用上の優先度の高いものから、高精細のデジタル撮影を開始した。資料のなかで、保存状態からみて撮影に高度な専門技術を要するものについては業者に委託することとした。その他の資料については、本格的な撮影機材(Nikon デジタルカメラ D800、Nikon 短焦点レンズ AF-S 60mm f/2.8G ED、LPL コピースタンド CS-6、LPL コピーライト FCL-427)を導入し、柏キャンパス内で随時デジタル撮影を行える環境を整えた(写真4)。

本科研のプロジェクトを通じて矢内原文庫の整理作



業を進めるにあたって、森本祥子室員にはアーカイブズ学の全般的な指導と作業環境の整備についての協力を受け、小川智瑞恵室員には資料整理と目録作成作業の協力を受けた。今後は、全資料の目録情報の取得と撮影を完了させ、学生問題研究所の研究活動の全貌把握を目指す。資料を適切に分類し、最終的には東京大学大学院情報学環が提供している Digital Cultural Heritage を通じてデジタル・アーカイブを公開する。

(しゅうとう よしき：
東京大学大学院情報学環特任研究員)

「学生とともに考える学徒出陣 70 周年—記憶と継承」

—（東京大学附属図書館・東京大学史史料室共催）を終えて、一緒に考えてみたこと—

谷 本 宗 生

2013年11月20日、東京大学小柴ホールにて18時から2時間ほど、学内・一般参加者合せて110名余りの参加者を得て、「学生とともに考える学徒出陣 70 周年—記憶と継承」（東京大学附属図書館・東京大学史史料室共催）が行われた。会が開始される前と終了後の時間に、大学史史料室のほうで学徒出陣に関する数点の資料を実際に展示して、参加者のかたがたにも関係資料を直接確認してもらうことができた。大学史史料室側の調査データは基本的に『東京大学の学徒動員・学徒出陣』（1997年、東京大学出版会）に纏められているが、学徒出陣にともなう学内措置・手続きなどを公的に記した『文部省往復』（1943年、1944年）や内田祥三総長の手持ち個人資料である「スクラップブック」（新聞切り抜き、書込み）、実際の学徒出陣で大学から各人に配布された日章旗（秋山進旧蔵）や学徒出陣で海軍に入団した法学部生らが当時綴った「第七期新兵 東京帝国大学法学部 思ひ出の記」（小西正巳旧蔵）などの史料室所蔵資料が掲げられた。法学部休学中に陸軍に入営した高浦昭さんが綴ったメモ、ノート類は、当時の状況をよくうかがい知ることができる貴重な資料で、ちょうどよい機会に高浦家より借用・展示できて幸いであった。この会に参加聴講いただいたご親族にも感謝したいと思う。また今回掲示することができた『太平洋戦争戦没者並空襲殉職者名簿』（東京帝国大学）は、1998年に学内倉庫から発掘されたものであるが、1946年3月30日に南原繁総長のもとで開催された戦没者慰霊祭で使用されたものではないかと推測される。



会は吉見俊哉室長（大学史史料室）の司会進行のもと、まず開会の冒頭で長谷川壽一理事（大学副学長）や古田元夫館長（附属図書館）によるご挨拶（趣旨説明など）が述べられた。1943年の在学学生徴兵猶予撤廃という学徒出陣から70周年を迎えた今、現代の学生諸君らとともにその史実を振り返り、学徒出陣の思いなどをあらためて考えることの重要性について強調された。次に講演者として、まず加藤陽子教授（大学院人文社会系研究科）が登壇された。「個々の記憶と歴史のあいだ」という題目で、1) 戦没・空襲被害の歴史の全体像をつかむことが大切、2) 歴史と記録国民の特質、3) 東京大学史史料室編『東京大学の学徒動員学徒出陣』から、4) おわりに、といった骨子レジュメにそって40分ほど講演が行われた。同時代のエリート青年らが対象とされたなかで、本学の戦没者らが1652名（1997年判明分、1926～1945年入学者を対象）いたこと、東京大学における追悼・慰霊の歴史は1941年10月10日、1943年10月20日、1946年3月30日の3度慰霊祭が行われていることなどが明示された。1941年4月には、大学附属図書館内の一室に英霊記念室が設けられるが、戦後以降は国立学校という組織管理上の問題などもあって、2001年に医学部卒業生らが医学部戦没同窓生232名の名と戦没地を刻んだ追悼碑を弥生門前に建立し、全学戦没同窓生の追悼碑は2000年に正門前に建立したと、加藤講演ではあらためて示された。この点については、質疑応答の際にフロアから、国立の学校でも福島大学や一橋大学などでの慰霊事例の指摘があった。戦後のわだつみ像の構内設置問題も、大学全学の合意を当時としては得られなかった事情もあるだろうとした。加藤先生が欧米の公文書館などでよくみかけた光景として、自分の家族史、祖先の移民史などを資料から熱心に調べる一般の利用者が多くいたという。記録と歴史とが自身の問題として捉えられている事例といえるだろう。学徒兵らに期待されたこととして、戦域の拡大にともなって下級指揮官や実際の兵器操縦員、軍速成教育体系の普通学教官、経理部将校・主計科士官が必要とされたことなどが示された。また陸海軍将校戦没者の多くを学徒兵が実際に担っていた事実も重要な点であった。それが戦局の過酷さを物語っているとさえ

るだろう。最後に、加藤先生は戦没学徒兵の思いとして上原良司さんらの遺書の一節を引用披露もされた。フロアの聴講学生からは、学徒兵を送り出した側の当時の教員らの思いについても質問が挙がった。学生らがペンを剣に実際に変えた意味は、学問の府である教育者の心情としてはいかばかりであったろうと想像される。この点については、私も教育者の1人としてやはり重要な視点ではないかと思い、自分なりに考えてみたいとした。当時の教員らが学徒らを送る言葉には時局にそう勇ましいものもあれば、繊細な教育者としての心情が吐露されているものもある。法学部長をつとめた末弘厳太郎は「こころ静かに学べ」として、「諸君の中に若しももうぢき戦に征くのだから今更学問しても仕方がないではないか—といふ風に考へる方がゐるならば、それは学問といふものが人間一生の仕事であり、毎日日々の努力によつて自らの智徳を磨き、少しづつ段々に進んでゆける永遠の道であることを知らざるものといはねばならない…諸君は決して試験のために勉強してゐるのではない、試験のない勉強、これこそ本当の学問の道であり、諸君がこの機会を善用して真の学問の道を味はれることを切望する次第である」(『朝日新聞』1943年10月2日、3面)と述べている。

次の講演者として、森本祥子特任准教授(大学史料室)が登壇された。「学徒出陣の記録—大学に残されたもの—」という題目で、パワーポイントを用いて30分ほど講演が行われた。講演の骨子は、次のとおりであった。1) 大学史料室について 所蔵資料、学徒動員・学徒出陣の実態調査、2) 大学の文書にみる学徒出陣 在学/修学期間と徴集延期期間の短縮、徴集延期の停止、大学の公式対応、出陣学徒の把握、昭和21年3月30日慰霊祭、3) 内田総長文書にみる学徒出陣 整理魔&メモ魔、4) 学生が残したものの壮行日章旗、学徒兵の記録(修養日誌と回想記)、呉・大竹海兵団第7期新兵17名、5) 記録があること、記録がないこと 記録は、組織が必要に応じて作成するもの。歴史は多面的に語れるよう、様々な視点でバランスよく情報は残さなければならない。コンテンツだけでなく、資料が作成されたコンテクストを理解し、多様な資料をそれぞれに解釈してほしい。森本講演では、題目にあるとおり、『文部省往復』などの大学の公文書、内田祥三総長のスクラップブックやファイル類、学徒出陣の学生らに渡した内田祥三名入りの日章旗、政治学科在学中に陸軍に入営して戦後に復学卒業した高浦昭氏が作成した「修養日誌」類、学徒出陣で大竹海兵団にて小西正巳二曹班で新兵の教育を受けた法学部学

生らの寄せ書き集など、さまざまなかたちで手がかりとして残された貴重な資料を介して、加藤講演同様に記録と歴史(学徒出陣)を考える趣旨であった。たとえば、学徒出陣で学生らに渡した日章旗にしても、当時布地購入には衣料切符が必要であり、学部ごとに切符の醸出箱を用意したところ、学内からだけでなく学外一般からも多数の切符提供があったとされる。森本先生も言及されていたが、学徒兵であった高浦昭さんも戦後朝鮮半島から帰国し、働きながら苦学して大学を卒業されたというように、学徒兵らの復学・受入れについても重要な視点であるだろうと私には感じられた。戦後復員した学生らにとって、寝るところもなく食べるのも十分ではないために、大学を休学または転学せざるをえない状態に陥ったものと思われる。1945年11月の段階で、応召学徒の1/3ほどがまだ復学したに過ぎないと内田総長には報告されている。

そして学徒出陣に関する教育家の五十嵐顕や安川寿之輔らの言及もとても重要であると私は考える。とくに五十嵐は自身の体験問題として、学徒兵の訓練をしたこと、学徒兵らが数多く亡くなっていること、学徒兵らによって実際に多くの人が犠牲になっていることなどをずっと追及し続けてきた人物である。私も大学人としてまた教育者として、学徒出陣を含めた戦時下の大学については、現代の学生らとともに今後も考えていくべき重要なテーマであろうと思う。企画展示や自校史講義といった試みも各地で熱心に行われているが、近年は学生らが積極的に取材調査や報告会・上映会を行い、彼ら彼女ら学生の素直な思いを明らかにしようとする動きもみられる。

会の最後で司会をつとめた吉見室長が、記録資料の重要性をあらためて強調され、本学の歴史として保存すべき記録資料は今後もしっかり管理していかなければならないとして、本学の大学図書館(アーカイブズ)の設置をつよく訴えて閉会となった。閉会後も、しばらく聴講学生らの何名かが展示資料をみて、資料を介していろいろ熱心に弊室スタッフらに質問を行っていた。附属図書館・大学史料室の共催で行った今回のシンポジウムであったが、このように多くのかたがたが2時間余りの間聴講され、とくに学生諸君が熱心に関心をもって会に臨んでくれたことは、本会の趣旨である「学生とともに考える」という意図が学生諸君にも相応に伝わった、共有されたからではないかと考えている。今回のシンポジウムにかかわった多くのかたがたに、私もあつくお礼を申し上げたいと思う。なお同上イベントの様子は、東大TVで録画公開されている。

(たにもと むねお：東京大学史料室)

受贈図書一覧（抄）（平成25年2月～平成26年1月）

同文書院記念報 愛知大学東亜同文書院大学記念センター	平成25年3月	玉川大学教育博物館 館報 第11号 玉川大学教育博物館	平成25年8月
大阪市立大学史紀要 第5号 大阪市立大学大学史資料室	平成25年10月	丹後国田辺城下竹屋町文書目録（京都府舞鶴市字竹屋） 菅原憲二（千葉大学文学部史学科）	平成23年3月
大阪大学アーカイブズニューズレター 第1号, 第2号 大阪大学アーカイブズ	平成25年4月, 9月	中央大学史紀要 第18号 中央大学入学センター事務部大学史編纂課	平成25年3月
学習院アーカイブズニューズレター 第2号 学校法人学習院 学習院アーカイブズ	平成25年7月	東海大学学園史ニュース 特別号 東海大学学園史資料センター	平成25年3月
神奈川大学会議録（十四） 第29集 神奈川大学資料編纂室	平成25年3月	東京外国語大学文書館 資料調査報告書1 東京外国語大学文書館	平成25年3月
金沢大学資料館紀要 第8号 金沢大学資料館	平成25年3月	東北大学史料館紀要 第8号 東北大学学術資源研究公開センター史料館	平成25年3月
関西学院史紀要 第19号 関西学院学院史編纂室	平成25年3月	アルケイア—記録・情報・歴史— 第7号 南山大学史料室	平成25年3月
関西大学年史紀要 第22号 関西学院学院史編纂室	平成25年1月	叢誌 第8号 日本大学広報部大学史編纂課	平成25年2月
関東学院資料集 第1号 関東学院学院史資料室	平成25年3月	武蔵九十年のあゆみ 根津育英会武蔵学園 武蔵学園記念室	平成25年8月
九州大学新聞・九州帝国大学新聞記事索引一 九州大学大学文書館	第19輯 平成25年12月	北海道大学大学文書館年報 第8号 北海道大学大学文書館	平成25年3月
京都大学大学文書館研究紀要 第11号 京都大学大学文書館	平成25年3月	宮城学院資料室年報一信・望・愛一 第18号, 第19号 宮城学院資料室	平成24年12月, 平成25年3月
近代日本研究 第29巻（2012年度） 慶應義塾大学福澤研究センター	平成25年2月	大学史活動 第35集 明治大学総務部総務課（大学史資料センター）	平成25年5月
皇學館大學百三十年史 史料篇一 皇學館 館史編纂室	平成25年3月	立教学院史研究 第10号 立教学院史資料センター	平成25年2月
校史 Vol.23 國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター	平成25年3月	立命館百年史紀要 第21号 立命館百年史編纂室	平成25年3月
専修大学史紀要 第5号 専修大学 大学史資料課	平成25年3月	龍谷大学史報 vol.13 龍谷大学大学史資料室	平成25年3月
拓殖大学百年史 昭和後編・平成編 拓殖大学創立百年史編纂室	平成25年3月	アーカイブズ 第49号～第51号 独立行政法人国立公文書館	平成25年3月, 6月, 10月

霞城館だより No.56, No.57 財団法人霞城館 平成25年7月, 平成26年1月	資料館紀要 第41号 京都府立総合資料館 平成25年3月
記念館だより(旧制高等学校記念館) 谷本宗生 平成25年7月, 12月	わだつみのこえ No.138, No.139 わだつみのこえ記念館 平成25年7月, 12月
書陵部紀要 第64号, 第64号〔陵墓篇〕 宮内庁書陵部 平成25年3月	新渡戸稲造(週刊『日本の100人』:歴史をつくった先人たち;No.092) (株)十象舎 平成25年10月
国文研ニュース No.30～No.33 国文学研究資料館 平成25年1月, 5月, 8月, 10月	探求録:中尾武徳遺稿集・戦没学生の手記 岡田裕之(法政大学名誉教授・野本線勃学生記念会会員) 平成10年1月
江戸東京博物館NEWS No.81～No.83 東京都江戸東京博物館 平成25年3月, 6月, 9月	遠山郁三日誌1940～1943年―戦時下ミッション・スクールの肖像― 立教学院史資料センター 平成25年2月
開港のひろば 第120号～第123号 横浜開港資料館 平成25年4月, 7月, 10月, 平成26年1月	永遠に清水を一薩摩藩士に学ぶ― 二見剛史 平成23年12月
北海道立文書館 調査研究事業報告書 第2号 北海道立文書館 平成25年3月	Ouroboros 通巻第46号～第50号 東京大学総合研究博物館 平成25年1月, 2月, 7月, 12月
一高同窓会通信 第12号 谷本宗生 平成25年3月	UP 第484号～第495号 (財)東京大学出版会 平成25年2月～平成26年1月
1880年代教育史研究会ニューズレター 第41号～第43号 谷本宗生 平成25年4月, 7月, 10月	東京大学法学部 研究・教育年報22 東京大学法学部 平成25年10月
佐佐木信綱記念館だより 第27号 佐佐木信綱記念館 平成25年3月	東京大学構内遺跡調査研究年報 8 谷本宗生 平成24年5月
渋沢研究 第26号 渋沢史料館 平成26年1月	赤門学友会ニュース 24号, 25号 武蔵学園記念室 平成25年4月, 9月
福島県史料情報 第35号～第37号 福島県歴史資料館 平成25年2月, 6月, 10月	東京大学経済学部資料室年報 東京大学経済学部資料室 平成25年3月
新潟大学蔵『川村文庫』について(抜刷) 小関恒雄 平成25年6月	2014 CALENDAR:東京大学史料編纂所蔵史料集 東京大学史料編纂所 平成25年11月
札幌市文化資料室研究紀要 第5号 札幌市総務局行政部文化資料室 平成25年3月	東京大学野球部90年史 東京大学野球部一誠寮内一誠会 平成22年3月
帝国大学総長山川健次郎日記(写本):中央公論 谷本宗生 平成25年12月	中国稲作学科 丁穎教授(1888-1964) Hunang Chao(Beijing University of Science and Technology) 平成23年6月
大学アーカイブズの社会貢献 ―2012年度全国研究会の記録:於同志社大学― 谷本宗生 平成25年12月	七十年の歩み 〔創立70周年記念 東京府立第六中学校 東京都立新宿高等学校〕 砂子田美代子 平成5年3月

史料室日誌抄録（平成25年8月～平成26年1月）

平成25年

9月2日（月）～9月6日（金）

小川室員、国立公文書館主催「平成25年度アーカイブズ研修Ⅰ」参加。

9月3日（火） 森本室員、矢内原科研の打合せ（柏・総合研究棟）。

9月6日（金） 広島大学高等教育研究開発センターより資料（東京大学新聞（合本版））3点受入れ。

9月13日（金） 野球部より史料受入れの確認。

10月1日（火） 室員打合せ（史料室）。

10月2日（水） 小西明氏より学徒出陣関係資料1点受入れ。

10月9日（水）～10月10日（木）

森本室員・谷本室員、全国大学史資料協議会（2013年度全国研究会）へ参加（明治大学）。

10月10日（木）～平成26年2月23日（日）

「史料で見る東大医学部・附属病院の155年」（健康と医学の博物館企画展示）所蔵資料貸出。

10月29日（火） 吉見室長・森本室員・総務課、内閣府・国立公文書館と大学文書館設置準備について打合せ（本部棟）。

11月20日（水） 東京大学附属図書館・東京大学史史料室の共催「学生とともに考える学徒出陣70周年—記憶と継承」にて森本室員講演及び室員参加（小柴ホール）。

11月20日（水） 三浦信夫氏より学徒動員関係資料3点受入れ。

11月27日（水） 森本室員・谷本室員、最首悟家にて所蔵資料確認。

11月29日（金） 高浦京子氏より学徒出陣関係資料複写15点受入れ。

12月5日（木） 三浦信夫氏より学徒動員関係資料17点受入れ。

12月13日（金） 森本室員・村上室員、総合研究博物館小石川分館内覧会出席（小石川分館）。

12月24日（火） 室員打合せ（史料室）。

平成26年

1月15日（水） 森本室員・谷本室員、新図書館構想連携事業について打合せ。

1月21日（火） 森本室員、デジタル文化財創出機構主催シンポジウム「進化するミュージアム2014」参加（JPタワー ホール&カンファレンス）。

この間の閲覧者数

学内者 3名

学外者 19名

主な学外閲覧者所属機関

お茶の水女子大学、神奈川大学、京都大学、慶應義塾大学、筑波大学、東洋大学、名城大学、日本大学、広島国際大学、早稲田大学、北京科技大学、茨城県庁、新潟県立歴史博物館

その他

文献撮影・複写許可件数 17件

調査（照会）件数 37件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第52号

発行日：2014年3月31日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077（直）

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉県稲毛区六方町13-2